

日本結核病学会東海支部学会

—— 第114回総会演説抄録 ——

平成21年11月22・23日 於 愛知県産業労働センター（ウイंकあいち）（名古屋市）

（第96回日本呼吸器学会東海地方学会と合同開催）

会 長 坂 英 雄（国立病院機構名古屋医療センター呼吸器科）

—— 一 般 演 題 ——

1. 当院における血行播種性結核（粟粒結核）の臨床的検討 °篠田裕美・林 悠太・垂水 修・中川 拓・齋藤裕子・山田憲隆・小川賢二・田野正夫（NHO 東名古屋病呼吸器）

2000年から2009年8月までに当院に入院した血行播種性結核について検討した。CTにて肺野にびまん性粒状影を認め2臓器以上から結核菌が検出されたものを確定例、1臓器から結核菌が同定されるのみであるがCT上びまん性粒状影を認め血行性播種が考えられる例を臨床的診断例とした。血行播種性結核は25例で、確定例が16例あった。確定例では男性8例、女性8例で平均年齢は61.6歳であった。基礎疾患を有する例は14例であった。死亡例は3例で、1例はAIDS合併例で、2例はDICやARDSを呈した。6例において治療中にステロイドを併用し、1例は人工呼吸管理を要した。臨床的特徴をまとめ報告する。

2. 左胸囲結核の1例 °伴 直昭・畑 秀治・大竹洋一郎・那須利憲・大平大介・廣瀬正裕・志賀 守・近藤りえ子・堀口高彦・立川壮一（藤田保健衛生大第二教育病呼吸器内）溝口良順（同病理）桑原和伸・小林花神・坂野健吾（成田記念病呼吸器）

症例は81歳男性。左陳旧性肺結核で当院通院中であったが2009年6月頃より左胸部膨隆が出現した。左前胸壁腫瘤にて同年8月7日左前胸部腫瘤切除術施行となった。術中病理組織所見より類上皮肉芽腫を認め結核と診断し、同日より抗結核薬の投与を開始した。経過良好にて退院となり現在外来通院治療中である。近年胸囲結核は以前に比べ稀な疾患となっており、若干の文献的考察を加え報告する。

3. 原発性肺癌との鑑別を要した非結核性肺抗酸菌症（NTM）の1例 °榎本泰典・松本修一・平松哲夫・小島英嗣・高田和外・志津匡人・岡地祥太郎・二宮記代子・森岡 悠・田中健太郎・後藤大輝・近藤安希子（小

牧市民病呼吸器アレルギー）

症例は57歳男性。検診の胸部X線異常にて平成20年12月当科紹介となった。右下肺胸膜直下に境界明瞭な長径15mmの結節を認めた。CTガイド下針吸引細胞診にて悪性所見は認めなかったがFDG-PBTでSUVmax 5.2と高値であり本人希望も強かったため、平成21年1月診断目的でVATSを施行した。術中迅速病理検査で肉芽腫性疾患であったため部分切除となった。切除片の膿汁はMAC-PCR陽性で培養3週目にて*M. avium*が検出された。病巣は完全切除できていたが2月より化学療法（RFP, EB, CAM）を開始した。結節影を呈するMAC症は比較的稀であり本例のように原発性肺癌との鑑別を要することも多い。若干の文献的考察を交えて報告する。

4. 血糖管理で自然軽快した*Mycobacterium gordonae*感染症の疑い例 °大西真裕・前田 光・都丸敦史・藤原研太郎・中原博紀・油田尚総・吉田正道（三重県立総合医療センター呼吸器内）田口 修（三重大医附属病呼吸器内）

症例は糖尿病を有する65歳男性。かつて経口血糖降下薬を服用していたが、自己判断で内服中止していた。2009年5月頃、咳嗽にて近医を受診。胸部X線で左上肺野の腫瘤状陰影を指摘され、当科紹介受診となった。画像から抗酸菌感染症を疑ったが、喀痰および気管支洗浄液の抗酸菌塗抹および結核菌PCRは陰性で、TBLB組織は非特異的炎症所見のみであった。当科受診時のHbA1cは13.5%と著しく不良で、血糖管理を行いつつ培養結果を待っていたところ、肺陰影は縮小傾向を認めた。喀痰抗酸菌培養陽性で*M. gordonae*が同定され、単回検出であったがその感染が疑われた。陰影は最終的に自然軽快した。*M. gordonae*による肺感染症は非常に稀であり若干の文献的考察を加え報告する。

5. 空洞性塊状陰影を呈し、診断に苦慮した*Mycobacterium shimoidei*感染症の1例 °小寺 仁・藤本

源・井端英憲・大本恭裕 (NHO三重中央医療センター呼吸器) 樽川智人・安達勝利・金田正徳・坂井 隆 (同呼吸器外) 中野 学 (同微生物検査) 田口 修 (三重大医呼吸器内)

M. shimoidei は、1963年に下出らが分離した Runyon III 群の非結核性抗酸菌の稀少菌種である。遺伝子学的検索で、*M. shimoidei* と確定した症例を経験したので報告する。症例は54歳男性。健診で右上肺野に空洞性塊状陰影を指摘された。CTガイド下生検で肺結核症を疑われ、

抗結核剤治療を施行されたが効果なく、約1年間の経過で陰影の増大を認めたため、肺癌・肺真菌症の鑑別で、右肺上葉部分切除術を施行した。手術検体の空洞内膿性物の塗抹でガフキー陽性であったが、各種PCRは陰性であった。Broadband PCR法で *hsp 65-gene* 陽性で、シーケンス解析で *M. shimoidei* と確定した。現在まで再発徴候は認めていない。若干の考察を加えて報告予定である。